

# 中山省三郎とツルゲーネフ

## はじめに

日本でのロシア文学受容の深度をはかる指標として、ロシアの国民的詩人プーシキンの受容過程を追ってみると、プーシキン没後百年を記念して改造社から刊行された、日本初の『プーシキン全集』（昭和十一～十二年、一九三六～三七）が、ひとつの頂点として位置づけられる。<sup>1</sup>この全集の編纂にあたって中心となっていたのが、中山省三郎である。

ロシア文学者として知られる中山省三郎その人の事績については、彼の死の直後に詩誌『至上律』第三輯（一九四八年二月）の追悼枠に掲載された、親友・火野葦平による文章「詩人中山省三郎」が最も早く、つづいて『日本近代文学大事典』第二巻（講談社、一九七七年十一月）において、野田宇太郎が執筆したものが、よくまとまっている。また中山の故郷である茨城県では、土浦市立図書館が「郷土詩人の近代文学作品・資料展」を開催し、『横瀬夜雨・野口雨情・山村暮鳥・中山省三郎 四氏の略歴と著述・

## 小林 実

評伝目録』（一九六一年十一月）という小冊子を出している。また『常総文学』第三号（一九七一年四月）が、関係者の文章を集め、横瀬隆雄編に成る略年譜を付して、現在最も信用に足る資料を提供しており、さらに『常陽芸文』第一九一号（一九九九年十一月）でも、特集が組まれた。

ただ事典の記載は別として、これらの紹介や研究は、詩人もしくは、長塚節研究者としての中山の姿ばかりが詳しく紹介され、肝心のロシア文学者としての業績については、じつはあまり検討されてこなかったということがいえる。

以下に見るように、ロシア文学者としての中山にとっては、プーシキン以上にツルゲーネフが重要であり、おそらくそれも詩人や長塚節研究者の姿とも大いに関係してくると思われる。紙数の関係上、その両側面の関係について考察する余裕はないが、とりあえずここでは、彼とツルゲーネフとのつながりについて論じていきたいと思う。

## 1 出世の階梯

改造社版『プウシキン全集』での翻訳に携わったのは、神西清（明治三十六年生まれ）、上田進（明治四十年生まれ）、という中山と同世代のメンバート、米川正夫（明治二十四年生まれ）、外村史郎（明治二十三年生まれ）、平井肇（明治二十九年生まれ）といった先達であった。外村（本名・馬場哲哉）は中山の早稲田大学での恩師であり、米川は同じく恩師ワルワー・ブプロワ（早大講師）の知人、神西は後述するように雑誌『セルバン』および『リベルテ』で一緒になった顔ぶれであり、上田は早稲田大学の後輩に当たり、平井は早稲田露文科一期生で三年次に中退しているため中山の在学時にはかぶらないが、おそらく外村あたりから紹介されたのであろうか。いずれにせよ翻訳者は中山を軸とするネットワークによって構成されていたことがわかる。

改造社版『プウシキン全集』は、日本のロシア文学受容史の重要な一齣であっただけでなく、中山省三郎がロシア文学者として頭角を現していた様子を映すものでもあった。

神西清によれば、ツルゲエネフやドストエフスキの強い影響をうけた日本近代文学も、遅れて移植されたフランス文学の影響があつて初めて、近代文学としての体裁をととのえたのだという。かくいう神西自身、メリメやシャルドンを補助線とすることで、プーシキンの創作活動を、ヨーロッパ文学史の文脈ととらえることに、おそらく日本で初めて成功した<sup>3)</sup>。それというのも、日本人が模倣したロシアの近代文学作品は、その多くがフランス文学と

の相互的な交流の産物であり、フランス文学の教養なくしては、正当な姿を見極めがたいにもかかわらず、ロシアとフランスの両方を見渡すことができる人材が、彼の登場までほぼ皆無だったからである。

東京外国語学校露語部在学中、神西は同級の蔵原惟人とならんで二秀才と称せられていた<sup>4)</sup>。周知のように、その後蔵原はプロレタリア文学運動に邁進していくわけだが、神西が左翼運動に染まらなかったのは、すでに外国語学校入学以前にフランス語を習得し、〈ロシア〉を相対化する視点を獲得していたということがあるかもしれない。

神西は卒業後、『山繭』『詩と詩論』などの文芸誌を通じて創作を発表する傍ら、ブルーストやジイドの紹介者としても活動しているというように、当初彼のメンタリテイは、ロシア文学ではなく、あくまでフランス文学畑に軸足を置いていたと思われる。次の雑誌の目次など、それがよく表われているように。

|                     |       |
|---------------------|-------|
| ブルースト               | 神西清   |
| ゲエテとヴァレリイとの出会       | 片山敏彦  |
| ヴァルリイ・ラルボオ          | 青柳瑞穂  |
| ナルシス再誕              | 辻野久憲  |
| ツルゲエネフ「めぐりあひ」の主題と風景 | 中山省三郎 |
| パピエニに於ける懷疑          | 三浦逸雄  |
| ストロスキイ氏現代を語る        | 高橋広江  |
| 文学的散歩               | 堀辰雄   |

これは『リベルテ』創刊号（昭和七年十二月）の目次であるが、見ての通り神西はブルーストを担当している。そしてここでツルゲエネフを論じているのが中山省三郎である。

参考までに『日本近代文学大事典』（講談社）で確認してみると、『昭和七・一（一）八・二』全四冊。編集兼発行人長谷川巳之吉。第一書房発行。同人は堀辰雄、片山敏彦、神西清、佐藤朔、青柳瑞穂、高橋広江、中山省三郎、藤原定、三浦逸雄ら。外国文学者が同人である関係上、掲載作品のほとんどが外国文学の評論、エッセイ、論考である（笠井秋生執筆）とある。ここにいう「外国文学者」について、創刊号の顔ぶれからもう少し詳しく見てみると、片山敏彦はドイツ文学とフランス文学、青柳瑞穂、辻野久憲、高橋広江そして堀辰雄は日本文学とフランス文学、中山はロシア文学、そして神西はフランス文学とロシア文学にそれぞれ造詣が深い。三浦逸雄（三浦朱門の父）は第一書房の社員であるが、東京外国語学校の伊語部の卒業生である。多少のばらつきはあるが、ひと目見て、フランス文学系の執筆者が大半を占めていることがわかる。その中で、中山の「ツルゲエネフ『めぐりあひ』の主題と風景」は、明かに異彩を放っている。

ところがこの九か月後になると、今度は神西が中山の領域に移っていく。『リベルテ』と同じ長谷川巳之吉の第一書房から発行された雑誌『セルパン』昭和八年（一九三三）九月号が、誌上で「ツルゲエネフ五十年祭記念論文」を特集する。そのラインナップは次のとおりである。

人及び芸術家としてのツルゲエネフ——中山省三郎  
ソヴェート批評家のツルゲエネフ観——上田進  
ツルゲエネフの日本文学への影響——木村毅  
ツルゲエネフと仏蘭西文芸家連——吉江喬松

中山の大学時代の後輩である上田進が加わり、ロシア語のでない木村毅・吉江喬松（弧雁）の両大家を除くと、神西・中山・上田の三名が、そのままのちの改造社版『プウシキン全集』のメンバーに引き継がれていくことがわかる。

ここで改めて、昭和七年（一九三三）の『リベルテ』創刊号、翌年の『セルパン』九月号、そして昭和十一年（一九三六）の『プウシキン全集』刊行という三点をつないでみると、神西清がフランス文学者からロシア文学者に転向していくのと並行して、当初フランス文学系の知識人の片隅にまぎれ込んでいた中山省三郎が、次第にロシア文学者の代表格とみられる地位にまで昇りつめていったということが見えてくるであろう。その分岐点となるのが、昭和八年（一九三三）だということがわかる。

## 2 経歴

ここでごく簡単に、中山の経歴を確認しておく。

明治三十七年（一九〇四）茨城県真壁郡に生まれる。名前の訓みは「せいざぶろう」が正しいが、東京の知人間では「しろうざぶろう」でも通っていたようである。

学校に在学中、彼らの影響で文学に傾倒するようになり、中学生ながら童謡詩運動にかかわって地元の小学校教師らと児童自由詩の指導に熱中している。

大正十二年（一九二三）に早稲田大学高等学院文科に入学し、同大学露文科への進学を目指す、その翌年、いわゆる「露文科騒動」が起き、大正十五年（一九二六）に大学に進学した際は、露文科新入生は中山一人となっていた。

「騒動」のあつた年の秋に、ワルワラー・ブブノワが露文科講師として赴任してきた。ロシアで画家として活動していたところ、日本人留学生・小野俊一と結婚した妹アンナの招きで、大正十一年（一九二二）母に付き添って来日し、日本で石版画を学び、村山知義らのMAVOや、棟方志功などと親交を結ぶ版画家として活躍することになる一方で、生活のために早稲田大学、またのちには東京外国語学校でロシア語とロシア文学の教師として勤める、日本のロシア文化受容史上重要な人物である。後年、中山はブブノワとの授業風景を次のように回想している。

昨日もブブノワ、今日もブブノワ、明日もブブノワと、毎日のやうにブブノワの詩集を読んだものであつた。その頃、私のクラスにはただ一人だつたので、かなり学校らしくない教育をうけてゐた、

「今日は何を読みませうか？ プウシキン、それともブブノワ？」

と、女の先生が訊ねる。

「今日はブブノワをどうぞ。」

と、私が答へる。

夏が近づくと、大きな庭園の樹蔭のベンチに腰をかけて、授業をうけることが多かつた。楓の若葉の間を洩れてくる初夏の日ざしが、詩集の白い頁のうへにこぼれてゐた。

（12との離別<sup>⑤</sup>）

卒業後は定職につかず、伊良子清白の詩集『孔雀船』再販、横瀬夜雨の詩集『雪燈籠』、北原白秋の歌集『篋』、童謡集『月と胡桃』、詩集『海豹と雲』の装幀をしたり、アルスから出た『世界童謡集』ロシア編に童謡二十一編を訳出したりしている（昭和四年）。白秋とは、童謡・児童詩運動に従事していた時期に雑誌『赤い鳥』を通じて知遇を得ていた。装幀家としての活動は、製本に凝る白秋と、恩師ブブノワの影響に因ると推測される。また卒業直後のこの時期、ブブノワとの共著で『独習新露西亜語』（春陽堂、一九三二年）を出している。

昭和八年（一九三三）から、ロシア文学の翻訳家としての業績が本格化する。ツルゲーネフ『散文詩』『獵人日記』を皮切りに、以後プーシキン、ドストエフスキ、シエストフ、メレシコフスキー、ソログロフ、シャガール等の翻訳に携わる。

昭和十一年（一九三六）十一月、茨城県結城郡岡田村にある長塚節の生家を訪れ、節の未発表遺稿を入手する。節の母と中山の祖父が乳きようだいであつた縁によるものである。研究の成果は、『長塚節遺稿』（小山書店、昭和十七年）、『長塚節全集』（斎藤茂吉と共編、河出書房、昭和二十二年～二十三年）に結実する。

また早稲田在学以来の親友・火野葦平が中国大陸へ出征した翌

年、昭和十三年（一九三八）より、華中・華南旅行をくり返している。そして昭和十五年（一九四〇）に、中国旅行、葦平、長塚節、ロシア文学について、それまで書かれた随筆をまとめ、『海珠鈔』と題して改造社から刊行。装幀は立石鉄臣、口絵は火野葦平による。条正照「愛書家 中山省三郎」の説明によると、『総じて省三郎の著書に云えることは、版面の位置に特長があることで、天（ヘッド）を狭くして、地（テール）を多くあけている。

従来、詩集等のなかには、若干この例が見られるが、一般的にはこの逆になっている本が多い」とあって、中身および装幀のすべてにわたって、中山自身のこだわりが凝縮されている一冊だといえる。

詩人としては、学生時代より同人雑誌を通じて詩作を続けていたが、自身の詩集を出せるようになったのは遅く、『羊城新鈔』（日孝山書房、昭和十五年）を処女詩集とし、『纏渺』（小山書店、昭和十六年）、『豹紋縹』（湯川弘文社、昭和十九年）と数も少ない。戦後、持病の喘息が悪化し、昭和二十二年（一九四七）四十四歳の若さで永眠する。

### 3 ツルゲーネフ没後五十年の拔擢

さて、再びロシア文学者としての中山省三郎の活動に戻ろう。

最初の翻訳業績は、昭和四年（一九二九）の『ロシア童謡集』であるが、本格的に仕事が集申し始めるのは、先に述べたように、昭和八年（一九三三）頃からである。その当初の舞台となったのが第一書房であった。

どのようなしてこの書肆と関わりをもつにいたったのか、その経緯は詳らかでないが、昭和五〜六年（一九三〇〜三二）「今日の詩人叢書」十冊の企画予定の末尾に《中山省三郎訳 ロシア訳詩集 森林帯》の書名があがっており、遅くとも昭和五年頃までには同書肆との関係ができていたと思われる。そしてすでにみたように、昭和七年（一九三二）晩秋には『リベルテ』のメンバーとして執筆している。

そもそも、第一書房とロシア文学とのつながりは、さほど深いわけではない。大正十二年（一九二三）創立以来、最初のロシア物は、円本ブームのさなか昭和二〜六年（一九二七〜三一）に刊行された『近代劇全集』全四十三巻及別冊二巻のうち、第二十七〜三十四巻の「露西亞篇」が最初となる。そこにはグリゴエードフ「智慧の悲しみ」からルナチャルスキー「熊の結婚」等にいたる、十九世紀から同時代までの全三十七作品が掲載されているが、翻訳は昇曙夢と高倉輝と山内封介の三人が分担している。

また同全集刊行期間中には、片上伸の論集『露西亞文学研究』（昭和三年四月刊行、その一ヶ月前に片上は脳溢血で急死）、山内封介訳メレシコフスキー著『文芸論』、同『露西亞革命の予言者』（昭和四年九月）が刊行されている。以上が、中山登場以前の第一書房でのロシア文学関係出版のすべてである。

これはあくまで推測の域を出ないが、早稲田大学に露文科が開設される直前に、早稲田でロシア文学を講じていた昇と片上のつながり、また大正十五年（一九二六）九月に『世界文豪代表作全集』第十一巻（同刊行会）で、昇と山内が名を連ねてツルゲーネフの「父と子」と「ルーゼン」を発表していることから鑑

みて、昇か山内のいずれかが初めに第一書房とつながり、やがて昇を軸に据えて、以上の出版が実現したのではないだろうか。ただし、高倉輝については、第一書房と早くから馴染みのあった土田杏村と、大正十年（一九二一）に長野県上田市の自由大学の世話役になったという縁があることから、土田人脈によるものと思われる。しかしながら、彼らと第一書房との縁は、『近代劇全集』刊行以降は途絶え、代わりに新人・中山省三郎が抜擢されるのである。

社主の長谷川巳之吉は、新人発掘が巧かったとされている。三好達治『測量船』（昭和五年十二月）、伊藤整・辻野久憲・永松定共訳ジョイス『ユリシイズ』（昭和六年六月）、茅野蕭々『ゲョエテ研究』（昭和七年七月）など、彼の眼にかなって日の目を見た詩人、作家、研究者は少なくない。関口安義によれば、『長谷川の新人発掘の巧みさは、物の本質を見抜く鋭い直観力に支えられていた』<sup>⑨</sup>というが、時代の新しい嗜好を察知する能力に長けていたのである。また、既存の書き手は、既存の出版社との関係が出来上がっているため、どうしても後発の出版社は、自ら新しい書き手を発掘し、社としてのオリジナリティを高めていかざるを得ないわけだが、彼には、その手腕に長けていたようである。

長谷川は、『リベルテ』創刊によって他の新人とともに中山省三郎を売り出していくが、これはあくまで前哨戦であって、本命は昭和八年（一九三三）二月刊行の『全訳散文詩』にあった。先にみたようにこの年は、ちょうどツルゲーネフ没後五十年の節目にあたり、ジャーナリスティックな話題に乗るうえで、有力な駒として中山を活用したのであった。恒例の社主自身による出版

広告には、次のように記されている。

〔…〕斯んなに美しい天才の全芸術を一貫して代表してゐる「散文詩」が未だロシヤ語から直接訳されてゐなかつたといふ事は如何にも遺憾至極に思はれる。僕は長い間いろいろと適訳者を物色してゐたのだが、前年フランスで未発表の散文詩が一冊にまとまつて出版されたのを機会に、それを少しづつ中山君に訳して貰ひながら、その中山君の訳筆の巧みさに実に全く敬服して仕舞つたのである。

愈々これはロシヤ文学界に新しい二葉亭が再現した！

と僕がそれほど感嘆の声をあげて喜んだのも無理はないと思ふ。それといふのは二葉亭の歿後ロシヤ文学の畑には翻訳者はあつても僕の考へるやうな詩的情緒のゆたかな文学者が殆ど出て来なかつたからである。〔…〕僕は若い頃には随分ツルゲーネフを愛読したものが然し此頃になつて特に彼の散文詩の味ひを噛みしめて楽しめる気持ちがあるので、幸ひ本年八月が彼の五十年祭にあたるのでそれを記念する為め茲に全訳を刊行して特に総革の美本としたのである。<sup>⑩</sup>

日本でのツルゲーネフ受容は、有名な「二葉亭四迷訳「あひゞき」を嚆矢とするが、実際に盛んに読まれるようになるのは、文壇で自然主義が流行る時期に西洋文学の輸入と翻訳が拡大し、それを引き継ぐかたちで、博文館や新潮社等が翻訳文学を、叢書として盛んに出版していた頃、すなわち明治末から大正初め頃が大きなピークであった。明治二十六年（一八九三）生まれの長谷川巳之

吉が、《若い頃には随分ツルゲエネフを愛読したものだ》と述懐していることが、それと合致する。関口安義編「長谷川巳之吉年譜」によると、明治四十一年（一九〇八）長谷川十五歳の欄に、《この頃新潮社の『文章講義録』の会員となる。次第に読書に目覚め、藤村・独歩・荷風らに熱中し、翻訳では二葉亭訳の「うき草」や、相馬御風訳の『その前夜』『父と子』、さらに昇曙夢訳の『六人集』や『毒の園』にうつつを抜かず》とある。

長谷川がうつつを抜かしたとされる『六人集』（易風社、明治四十三年五月）所収のザイツェフ「静かな曙」に関する昇曙夢による解説には、《彼の作品を読むと、直接強い肉の刺戟が無い代りにしんみりとした優しい静かな女性的の柔かい調子が味はれる。此点に於て彼の作品は水彩画のやうなもので、夢のやうな淡い心持や、詩のやうな静かな空気が全体に漂ふて居る。散文詩の『好典型である』とある。さらに、のちに吉江喬松（弧雁）が《あゝ、した作品こそは真に散文詩とも云ふべきものではなからうかと、その当時深く愛読したものであるが〔…〕》と同作を回想している。つまりそうした味わいのある原文の感興を訳す手腕において、昇はすでに定評があり、当然ツルゲエネフ作品の詩情を伝える訳者としても、十分な資格があつたことを、長谷川はわかまえていたであろう。にもかかわらず、《二葉亭の歿後ロシヤ文学の畑には翻訳者があつても僕の考へるやうな詩的情緒のゆたかな文学者が殆ど出て来なかつた》という誇張的な言い方に、あえて新人を推しだす第一書房の意気込み（？）を読み取ることが出来る。

#### 4 故郷とツルゲエネフ

一方、中山本人はこの依頼に対して、どのように処していたのであろうか。

先にみたように、早稲田在学中は、ブノワのもとでブロークを読んでいた。《その頃、私はブロークの文献といふ文献をあつめ（勿論、日本にあて求められる限りにおいて）、ブロークの歩いた道をふりかへることに一日一日を費ひしてゐた》（12との離別）<sup>15</sup>とも語っている。卒業論文のテーマはチュツチェフであつたという。ブロークはロシア革命前後に活躍したシンボリズムの詩人、チュツチェフはプーシキンの同時代人であるが、《世紀末にシンボリズムが台頭して、メレシコフスキイ、プリューソフ等が自らの始祖として、プーシキンに匹敵する位置をあたえ》た詩人。つまり学生時代の中山は、（ブノワの好みも反映しているかと思われるが）明らかにモダニストであつた。

しかしその一方で、別のところでは、初めてツルゲエネフ作品と出会つた思い出を振り返っている。

私は中学生の頃に、先生から同じ村の横瀬夜雨氏や荒野放浪のところへ書物を届けることを托され、或ひはまた先生の方へ届ける役目をいくたびか仰せつかつたのを記憶してゐるが、〔…〕父の従兄弟にあたり、早稲田の文科を出て、小説も書き、露西亞文学の翻訳などにも手を染めたことのある荒野氏は私に小説を読むことを教へた恩人であるが、その頃、私

にメッセンジャ・ボーイの報酬として、「木像」と「ツルゲエネフ短篇集」「罪と罰」の三冊を呉れた。最初に読んだのは「ツルゲエネフ短篇集」その次は「罪と罰」で、「木像」は「要するにたいした小説ではない」といふ批評にしたがつて遂に読まずにしまったが、右の二つの露西亞文学の書物が私に与へた感銘は大きかつた。ツルゲエネフの自然描写を少年の私はいくたびか口ずさみ、つひには諳記するほどになつてゐた。四六判の藤むらさきの表紙、吉江弧雁先生の訳である。

(うつろひ)

ここで回想されている『ツルゲエネフ短篇集』は、明治四十一年(一九〇七)十一月に中外出版協会から出たもので、内容は「森林の旅 第一日」「森林の旅 第二日」「ピエジンの曠野」「死」「苺の清水」「自然」「基督」「森と原野」「犬」「山番」からなる。うち「自然」「基督」が『散文詩』から、「ピエジンの曠野」「死」「苺の清水」「森と原野」「山番」が『獵人日記』から採られている。

察するに、第一書房からの『全訳散文詩』の依頼は、モダニストとしての感性よりも深いところにある郷愁を刺激したのではないだろうか。

また、先に企画された『ロシア訳詩集 森林帯』が頓挫する一方で、この度のツルゲエネフ物は順調に刊行されたということに、日本の読書界に残したツルゲエネフの影響の深さが、改めて感じられる。中山のロシア文学者としての在り方も、この影響圏から脱することはなかつたといえよう。さらにこの回想には、興味深

い点がある。

吉江弧雁訳『ツルゲエネフ短篇集』という情報は、『四六判の藤むらさきの表紙』という具体的な姿をもつて記憶されていることから、おそらく中山の脳裏には、その本が荒野放浪から手渡されたときの情景や、自宅の机や書棚に置かれている様子や、手に取つて頁をめくる感覚などが、まざまざと想起されていたにちがいない。さらに『いくたびか口ずさみ、つひには諳記するほどになつてゐた』とあるように、それを発生する身体感覚も想起されたであろう。このように、ツルゲエネフの名は、彼にとって少年時代の個人的かつ個別的な記憶と、密接に結びついているのである。

中山は茨城県真壁郡紫尾村大字酒寄に生まれるが、生まれてすぐに生母が亡くなり、一家は、祖父中山精一が医院を開業していた同郡大宝村大宝(現下妻市大宝)に移った。そのため彼にとつての郷里は、この大宝ということになる。親類の渡辺伍郎は、次のように説明している。

省三郎の父が開業し、家族とともに住んでいたのは、大宝郵便局の北隣りである。むかしそこに料理屋があり「橋本」といった。(かつて大宝は八幡神社のいわば門前町でもあり、宿場町でもあって、茶屋宿屋など少なくなかつた。)中山医院はその「橋本」の家を借りたものだが、家人も村の者も

「中山医院」とは言わず、相変わらず「橋本」と呼んだ。「橋本」から北へ、二軒おいてマサヤ(無公宅)。マサヤから六軒おいて「カミ(上、北方)」の家——省三郎が祖父母と(の



ちには祖母と)住んでいた、もとの中山家である。マस्याは呉服、荒物乾物、その他を扱かういわゆる「よろず屋」だったから、中山家の人達も、店に来る機会は非常に多かったわけである。<sup>18)</sup> (省三郎と私)

文中「無公」とあるのは、荒野放浪(渡辺守一)の別号で、渡辺伍郎の長兄にあたる。一族が近所に固まってくらしていたわけである。

平成二十七年(二〇一五)現在、郵便局北隣は駐車場と空き地になっており、付近にはマस्या呉服店のみかろうじて残っているが、一帯の西側に大宝八幡宮と大宝小学校のある大宝城址の丘陵が迫り、東側には遠く筑波山を望む田園が広がる様子は、百年前の趣とそれほど大きく変わってはいないと思われる。

そうした風景と《四六判の藤むらさきの表紙》や、その本の文章を暗唱した記憶とが結びついて、ツルゲーネフの名は語られているのである。おそらくこのような体験は、新潟県出雲崎出身の長谷川巳之吉においては、二葉亭四迷や相馬御風の翻訳本によってもたらされたであろうし、文学にかぶれた近代の地方出身者の多くが、それぞれの実体験において同種の郷愁を抱いたことであろう。

## 5 第一書房の読み方

ところで、第一書房といえは装幀に粋を凝らした美装本の出版で知られる。《第一書房の出す本は、みんな装丁が見事でケース

(箱)もよかった。そして又、本文に使う紙が上質で、読んで心地好かった<sup>19)</sup>》というような言葉は、諸氏の回想の中に散見するし、書肆自身がそれを宣伝している。

第一書房の書籍は、特に俗臭を排して、デリケートな感じを主として居りますから、店頭で人目を惹くといふ事よりも、書齋へ持つてかへつて、その本を静かに楽しむ時に、初めてその味が出るやうに心を用ひてあります。<sup>20)</sup> (第一書房の出版)

このように、本の読み方が具体的に示唆される(指示される)ということは、読書という行為が、抽象的な動作としてではなく、読者の身体、読まれる場所・時間、読まれる一冊の書籍、それらが総合する雰囲気等によって限定される、具体的な営みとしてイメージされていることを意味する。つまり第一書房の書籍を読むということは、ただの読書ではなくて、まさに「第一書房の書籍を読む」ということでなければならぬ、それ自体が、《特に俗臭を排して、デリケートな感じを主として居ります》というように、他を排除して独自の文化として屹立する行為なのである。

ただしあらかじめ断っておくと、当時美装本出版を競っていたのは他に、「胡蝶本」で知られる粉山書店をはじめ、北原鉄雄のアルス、装幀家・秋朱之介が関わった以士帖印社や三笠書房、『ルウベンスの戯画』や『伊豆の踊子』の出版で知られる江川正之の江川書房など、名の知れた出版社がいくつもあり、第一書房は、あくまでその一つに過ぎない。とはいえ、劇作家の飯沢匡などは、

《世に「岩波文化」という言葉があるが、今から見ると明かに「第一書房文化」というものが一時期、厳然としてあった」と述べており、美装本の世界で第一書房が少なからぬインパクトを占めていたことは事実である。

中山省三郎訳の『全訳散文詩』も、またこのインパクトを纏う幸運に恵まれた。

架蔵本からその姿を描いてみると、土色の総革装で背に四本のバンドのついた本製本という、古い洋書の風格を模した作りがまず特徴である。判型は、小口134mm×天地161mm厚さ20mmで四六判より縦にやや寸が詰まった独特の四辺形。「ツルゲエネフ／全譯 散文詩」と金押しの特徴があり、表紙の上部には「И. С. ТУРПЕНЕВ / СТИХАТВОРЕНИЯ ВПРОЗЕ」と黒く印字されている。小口は箔無しで、地のみ化粧裁断されていない。

本文の組版は、明朝五号活字十四行三十五字詰で、下段のノンブルとともにのどに寄せて、左右余白が広くとられている。総ページ数は二二〇。用紙は所々に繊維がみえる粗い手触り（コットン紙か?）。一九九グラムの重量は手にして軽いと感じられる。

一言でいえば、アンティークな外観をもち、手の大きさにちょうどなじむ、こじんまりとした姿の瀟洒な本である。

いま実際に、これを手に取り、頁をめくって、冒頭を読んでみる。

時は七月、終りの日、このあたり一千露里、<sup>ギルス</sup>露西亞国、わが郷土。

涯り知られぬ暗藍色に濡れわたる空、ただひとときの離れ

雲、浮ぶともなく、消ゆるともなく。日は暖かに、風もなく、  
……空気はしほりたての牛乳のやうだ！  
（田舎）

さて、親切にというか、おせっかいにというか、第一書房は、これをどんな風景の中に置いて読むかということ、それとなく示している。同じ年の九月に刊行された中山訳ツルゲエネフ作『獵人日記』上巻の巻末に、「中山省三郎訳ツルゲエネフ『散文詩』に対する世評」と題して、神西清、松岡讓、福田清人、三好達治という第一書房ゆかりの諸氏による書評広告が掲載されており、福田清人が次のように書いている。

スリ硝子に木の葉の影、あたたかな昼前、黄色い本を読ん  
でゐる。私はホツと細い吐息をする。省三郎兄、あなたはほ  
んとにいい仕事をして下さつた。おだやかな、しつとりとし  
たあなたの心境が、ツルゲエネフにとけいつて、この雅致の  
あるものを産んだ。  
（傍点引用者）

ちなみに彼は、昭和四年（一九二九）五月から六年（一九三一）十二月まで、第一書房に勤めていた元社員であり、当然ながら、同社の出版物の取り扱ひ方には精通している。

文中にある《ほんとにいい仕事》とは、そこだけ取り出せば中山の訳業への賛辞だと解釈できるが、《黄色い本を読んでゐる》という一文が初めにあることで、《この雅致のあるもの》が指し示す対象が、本文の内容だけでなく書籍そのものの出来具合も含んでいる錯覚を許すような、曖昧な表現となっていることに気付

く。この曖昧さが、《おだやかな、しつとりとしたあなたの心境が、ツルゲエネフにとけいつて》いるという、陶酔的な読書体験をもたらすレトリックである。

福田はこの本を、《スリ硝子に木の葉の影、あたたかな昼前》に読むことで、印刷された中山の翻訳文とツルゲエネフの心境とが溶け合うという体験をした。読書体験がこうして具体化することで、かつて中山が吉江弧雁訳『ツルゲエネフ短篇集』の薄むらさきの表紙に経験したと同様、『全訳散文詩』の読者にも、書物としての郷愁が、新たに生み出されることになるのだろう。

(…)表紙だけで、アアあすこの本とわかるのはなかったが、第一書房のには、それがあつた。明治、大正、昭和、その戦前戦後を通じて、形式からも内容からも、あれだけ個性を發揮したものはほかにない。

読んだ。そして書棚に並べて楽しんだ。けれども、空襲の火で、第一書房のばかりではないが、蔵書のあらましを失つた。

戦火は、私からあらゆるものを奪い去つたが、本の内容はもとより、装幀という形式からも、私の得た感銘、心の養いになつたものは、何も奪われることなく、そのまま私に残つている。<sup>23</sup>

(入江相政「第一書房と私」)

## 6 朗読する翻訳者

先の福田清人の評が、主に書物としての『全訳散文詩』の読み

方を示していたとすると、同じく評を寄せた神西清は、また別の角度から本書を紹介している。

見わたしたところ、人として中山氏ほどにこの「散文詩」の移植に適しい人はないのだ。僕は氏と相知つてまだ日が浅いので断言は出来ないが、彼はひそかに自分でも静かな詩を物してゐさうな、何となくそんな感じの人である。その詩人が久しい年月を費し、詞藻を傾け、音律を練り、もつと大切なことにはツルゲエネフその人にまるで子のやうな愛の心を燃やしながら、この仕事をやり遂げた。而もオークル・ジョーヌの總革に包まれて、落ちつきのあるいい本になつた。ツルゲエネフ没して五十年、いま彼の満足の微笑を見るよすがもないのが唯々残念である。<sup>24</sup>

神西も末尾では本の装幀を褒めているが、その前に中山を、言葉を練る詩人として評価している。中山がいつから作詩を始めたのかは不明だが、すでに中学時代には、『文芸の書物に読み耽り、文章を書いては投書などに努めてゐる上に、小学生に童謡や自由詩や綴方などの指導に熱心して肝心の教科書の勉強をおろそかにした』(福田友之「省ちゃん」<sup>25</sup>)という程であり、横瀬夜雨ら文庫派の詩人たちとの交流もあった。また、その頃、『八幡神社の裏の土塁に座つて、風野新一郎や齋藤辰三らと人生を論じ、将来を語り合ひ、友達の間など話し合つたりしたが、そんな時省ちゃんは目をつむつて瞑想に耽るやうなポーズをとつてゐると、齋藤は「省ちゃんは詩人のやうだ」と讚いた』(同前)ともいう。尤も

文学好きであることと詩人であることは、別の次元のことであるので、これはあくまで参考までの逸話に過ぎない。

神西は知っていたかどうか定かでないが、じつさに中山は、《詞藻を傾け、音律を練り》ながら翻訳に取り組んでいたことが、近親者の証言から明らかになっている。弟の育四郎は次のように述べている。

いかに原作者の気分を表現するか、いかに原文の持ち味を生かすか、仲々気を使ったようだ。特に漢字の選び方はうるさかった。漢字の持つ「ニアンス」と原文の「ニアンス」がかけ離れていないか、と何回も読み直し、ある時は朗読して適当なものをさがした。何枚かの原稿が出来上ると更に朗読し、時には姉も仲間に入れて気に入らぬところには筆を入れた。和服姿で机に向かって自分の訳を朗読している姿は全く離脱した世界に住んでいる人のように見えた。<sup>27)</sup>

(中山育四郎「追憶の記」)

漢字の選び方などに繊細でエステティックなこだわりがあったということは、心ある翻訳家ではよく聞く話であるが、むしろここで気にしなければならぬのは、彼が自身朗読しながら翻訳に取り組んでいたということである。じつは妹も同じような証言を残している。

「時は七月、終りの日、このあたり一千露里、露西亞国わが故郷。涯り知られぬ暗藍色に濡れわたる空、たゞひとときの

離れ雲、浮ぶとも、消ゆるともなく、日は暖かに、風もなく……。」この散文の訳詩が成った時、籐椅子をゆすり乍ら、この初章を朗々と詠み上げて、会心と陶醉の世界に遊ぶ兄の姿を、今私はまざまざと、まなぶたに再現する。<sup>28)</sup>

(加藤三知「思い出すままに」)

そういえば、先に見た中山自身の吉江弧雁訳『ツルゲエネフ短編集』に関する回想でも、《私はいくたびか口ずさみ、つひには語記するほどになってゐた》と述べられていた。どうやら、中山には文章をしつかり確認したり、堪能するときに、それを口ずさむ癖があるようなのだ。のちに彼が小山書店からメレシコフスキー『永遠の伴侶』を出すときも、編集に当たった野田宇太郎が、その一節を暗唱して見せた中山の姿に感銘をうけている。《自分の文章を文学としてすらすらと朗読の出来る翻訳者など、さらざらにあるわけではない。ところが、中山氏は違つてゐた。朗読でなく、暗記するまで自分の文章を練り上げてゐたのである。わたくしは中山氏の詩人として、文学者としての立派な態度に、心から敬服した。》(中山省三郎のこと)<sup>29)</sup>

中山にとつて文章とは、声帯や腹膜を動かして得られる身体的な運動を伴うものだったことが、以上の複数の証言から明らかである。ということは、彼の紡ぐ言葉は、音読して初めて堪能できるものだと、読者は心得なければいけないのかもしれない。

ただ、ことツルゲエネフに関しては、翻訳のための単なる確認作業ではなく、もつと私的な慰めですらあつたようなのである。昭和九年(一九三四)に三笠書房版『ドストエフスキ全集』

の「白痴」翻訳に携わった時に残されたと推測される次のようなメモを、親友の火野葦平が紹介している。

夜明けの雨が葉をぬらしてゐる、

読む、アンドレ、ワルテルを、

声をあげてツルゲーネフを、

さうして「白痴」の鱗をおとす。

戸のそとには、息もつかずに

「白痴」が私の起きるのを待つてゐる。

私はそれを知らながらそつと抜けだして

「初恋」の灌木のしげみに入る。

「白痴」はいらだつ、私を追ふ、憤る、

私は疲れる、囚人のやうに坐つてゐる。

(火野葦平「詩人中山省三郎」、傍点引用者)

これは、ドストエフスキーの翻訳に疲れた愚痴を詩にしたもので、発表を意識して書かれたものではない。ここからうかがえるように、中山にとってツルゲーネフ作品は、出版社からの依頼で付き合うだけのものではなく、個人的にも《声をあげて》読むような特別なものだったことがわかる。それはおそらく、故郷でのくらしとむすびついた、原体験の記憶からくる親しみだったのであろう。

以上のことから、中山省三郎のツルゲーネフへの入れ込みは、郷土への深い愛着に根差したものであることが確認される。おそ

らくそれは、のちの長塚節の遺稿整理への取り組みにも通じると推測されるが、これは今後の課題として、いずれ稿を改めて論じたいと思う。

※引用に当って、旧字体漢字は新字体に改めた。

## 注

(1) 小林実「近代日本のプーシキン受容史素描」(『世界文学総合目録』第十巻、大空社・ナダ出版センター、二〇一二年十二月所収)を参照。

(2) 《わが国へのフランス文学の本格的な移植や紹介は、ロシア文学よりもやや後れて、上田敏が象徴派の新声を伝へた明治二十九年ごろが出发点であった。その名訳詩集『海潮音』は、明治三十年代中頃の仕事である。……」フランス文学に比べれば、ロシアの写実文学はいはば野性の文学であり、あの民族に固有の深刻な不合理性のあらはれであつて、これを正確な意味で自然主義と呼ぶことは、いささか語弊をともなふ。その一種のズレを正す役割をつとめたのが、とりも直さずフランス文学の移植であつた。よかれあしかれその影響があつて初めて、わが文学は「おう近代文学としての体制をととのへたと言ふことができる。」(神西清「露仏文学と日本」『NHK教養大学』一九五四年十二月／『神西清全集』第五巻、文治堂書店、一九八四年七月、二〇八頁)

(3) 神西清によるプーシキン受容については、小林実「神西清とプーシキン―翻訳家の散文精神―」(『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第45集、二〇一五年二月)を参照。

(4) 「神西清年譜」(『神西清全集』第六巻、五三二頁)

- (5) 主任・片上伸(天弦)の不祥事により、片上他、馬場哲哉(外村史郎)、原久一郎(白光)が退職、学生たちも反発して転科していったという事件。坪内逍遙の日記に、《片上対牛島某の同性愛問題につきて 露科一同退職諫告の事を知る》(『逍遙日記 大正十二年〜大正十四年 延葛集 第二号、第三号』(未完・坪内逍遙資料集 三三) 逍遙協会、二〇〇一年十一月、一二九頁)とある。また中山一人が転科しなかった理由について、弟育四郎は次のように述べている。《兄もこの時転科の希望を持つたらしくかったが、父の反対に会った。「省の奴、好きで選んだ道ではないか。今更人が転科するからといって、意地がなさ過ぎる。」ともうらしたことがある。私は転科に反対なのだ直感した。子供達の希望に対しては甘い方の父であるが、この時は心外と言わんばかりだった。私の前でこんなことをもらしたのは、将来に対するいましめの意味を暗にほめかけたのかもしれない。》(『追憶の記』『常総文学』一九七一年四月)
- (6) 『書物』一九三四年五月
- (7) 『常総文学』一九七一年四月
- (8) 同叢書のうち三好達治著『測量船』(一九三〇年十二月)巻末に掲載の出版広告を参照。ただし、中山の『森林帯』は刊行されなかった。その理由については未詳。
- (9) 林達夫・福田清人・布川角左衛門編著『第一書房長谷川巳之吉』日本エディタースクール出版部、一九八四年九月、三七頁
- (10) 『セルパン』一九三三年八月
- (11) 前掲『第一書房長谷川巳之吉』三二四頁
- (12) 昇曙夢訳『還暦記念 六人集と毒の園』正教時報社、一九三九年九月、五八頁
- (13) 吉江喬松「昇曙夢氏の翻訳文学礼讃」(前掲『還暦記念 六人集と毒の園』所収)
- (14) 『書物』一九三四年五月
- (15) 火野葦平「詩人中山省三郎」(『至文律』一九四八年三月)を参照。
- (16) 川端香男里編『ロシア文学史』東京大学出版会、一九八六年三月、一四四頁
- (17) 中山省三郎『海珠鈔』改造社、一九四〇年十月、三三四〜三三五頁
- (18) 前掲『常総文学』一九七一年九月
- (19) 内村直也「雪の降る寒村から……」(前掲『第一書房長谷川巳之吉』所収、一五六頁)
- (20) 『第一書房図書目録』一九三四年
- (21) 前掲『第一書房長谷川巳之吉』一七七〜一七八頁
- (22) ツルゲーネフ作、中山省三郎訳『全訳散文詩』第一書房、一九三三年二月、九頁
- (23) ツルゲーネフ作、中山省三郎訳『獵人日記』上巻、第一書房、一九三三年九月、巻末所収。
- (24) 前掲『第一書房長谷川巳之吉』八五頁
- (25) 前掲『獵人日記』上巻、巻末
- (26) 前掲『常総文学』一九七一年九月
- (27) 前掲『常総文学』一九七一年九月
- (28) 前掲『常総文学』一九七一年九月
- (29) 前掲『常総文学』一九七一年九月
- (30) 前掲『至文律』一九四八年三月  
(こばやしみのる 十文字学園女子大学准教授)